



Title	<紹介> 岸本恵実・白井純編『キリシタン語学入門』
Author(s)	伊藤, 智弘
Citation	語文. 2022, 119, p. 59-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/95250
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

紹介

岸本恵実・白井純編『キリシタン語学入門』

伊藤 智弘

キリシタン語学は、日本におけるキリスト教宣教のために編纂された文献を言語資料として研究を行う学問分野である。この分野の研究では例えば、キリシタン文献に現れるローマ字表記の分析から、中世日本語の音韻に関する重要な知見が引き出されてきたことがよく知られている。近年では、印刷技術や、世界規模で行われた「宣教」という観点を取り入れることで、過去の研究の再検討が行われるのみならず、日本語学、また、言語学の内部にとどまらない国際的・学際的な研究分野として展開しつつある。

そのキリシタン語学について、該分野において実績のある十三人の研究者によって執筆・編集された概説書が『キリシタン語学入門』である。

本書は大学（院）生への指導の手引きとすることが想定されており、要所で「レポートや論文を書く際にはどうすればよいか」という視点からの記述がある。特に初学者の場合、分野についての「概説」はもちろん、「何に注目したらよいのか、どんな作業をすべきなのか」を教えてほしい場面も多いであろう。本書はこの要求に応えてくれる。

本書の内容は、大きく「理論編」「実践編」の二部からなる。「理論編」で述べられるのは、キリシタン語学研究に際して踏ま

えておくべき、基礎的な知識や研究史である。これまでの研究の中で何が問題とされて何が明らかになってきたのか、また、これから問題とすべきことは何なのかが纏められている。ここでキリシタン語学研究の流れを掴んでから、芋づる式に先行研究に当たっていくのがよい。

「実践編」では、『日葡辞書』『落葉集』『日本大文典』をはじめとして、キリシタン語学研究（の内外）でよく参照される文献の扱い方を解説しており、個々の資料について、どんな特徴に注目すればよいかを学ぶことができる。

実践編にはさらに具体的な作業手引きとして、七・一章には〇三（日本語歴史コーパス）を活用した研究手続きが、八章には演習や講読を想定したキリシタン文献（ローマ字本）の翻字・注釈作業の手続きが示されている。これらを参考にしながら文献と向き合っていくことで、調査・研究のやり方を身につけていくことができる。また、『日葡辞書』や『天草版平家物語』は既に国字へと翻字されたテキストが言語資料として利用されることも多いであろうから、これらの章は「演習」の必要性がなくとも一読しておきたい。

ところで本書は、印刷史の観点を多く取り入れた豊島正之編『キリシタンと出版』（八木書店、二〇一三年）の入門編を意図しているところがあるといい、併せて読むことが勧められている。ここでは、キリシタン版国字本における「活字」をめぐる問題について、少しだけ両書の併読を試みる。

キリシタン版国字本は、金属活字鑄造段階における吟味によって、二千字程度の漢字から成る整然とした「漢字表記↓語」・「語↓漢字表記」の対応関係（用字規範）を実現していた。しかし、キリシタン版の中でも後期成立の『ひですの経』では、活字不足によって木活字を追加するという事態が頻発し、用字規範に破綻が生じる。これは「活字印刷の物理的問題が表記規範にも及んだ典型」である（『キリシタンと出版』所収、白井氏執筆）。

では、（金属）活字不足という事態に繋がった要因は何か。整然とした用字規範を実現した金属漢字活字のセットは、「活字制作者」イチク・ミゲルという個人を軸として制作されていたために、ミゲルの病没によって金属活字の新鑄は困難になった（同上、豊島氏執筆）。

ここで注意が向くのは、『ひですの経』における木活字の使用が、突発的に生じた活字不足という問題に対する、いわば弥縫策としての側面を持っていたことである。一方、本書が提示する以下の「仮説」（「理論編」第四章、白井氏執筆）は、それと（排他的ではないが）異なる注意の向け方を示唆する。

表現や表記をある程度自由に選択できる翻訳宗教文献とは異なり、日本の古典に基づく本文や漢文脈を含む本文の忠実な漢字表記には、二千字水準の漢字活字セットによる印刷では対応しきれない。ある漢字の活字をいくつ用意すればよいかも、予測が難しい。国字本の印刷にはこうした問題が伴うが、ここで、「基盤部分を金属で製作し、不足部分を木で補う」という効率的なハイブリッ

ド印刷が、日本語の漢字に対応するキリシタン版の活字印刷の第2段階として早い段階で構想された姿だったと考えたい」とするものが、本書に示された「仮説」である（第四章、白井氏執筆）。

「ハイブリッド印刷」を早くから構想していた、という観点は、印刷に木活字を導入することの有用性に注意を向けさせてくれる。この「仮説」をどう評価・検証するかは今後の課題であるが、キリシタン文献の印刷を多面的に見るための視点が獲得できることは重要だろう。

本書は、キリシタン語学についての優れた入門書としてだけでなく、キリシタン文献を素材とした、文献学の優れた実践ガイドとしても読むことができよう。キリシタン語学はもとより、広く言語や文献資料を扱おうとする人に勧められる一冊である。

（八木書店、二〇二二年三月、一六〇頁、二、五〇〇円＋税）

（いとう・ともひろ 本学大学院博士後期課程、
日本学術振興会特別研究員）